九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

川口隆行著『原爆文学という問題領域(プロブレマティーク)』

楠田, 剛士
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

https://doi.org/10.15017/15105

出版情報：九大日文. 12, pp.122-125, 2008-10-01. 九州大学日本語文学会
バージョン：
権利関係：

◎書評

川口隆行著『原爆文学という問題領域（プロブレマティーク）』

楠田（KUSUDA） 剛士（Tsuyoshi）

目次

序
第一章　原爆文学という問題領域（プロブレマティーク）―「夏の花」「黒い雨」の正典化、あるいは『原爆文学史』
補論Ⅰ　小沢節子『「原爆の図」―描かれた〈記憶〉、語られた〈絵画〉』
第二章　朝鮮人被爆者をめぐる言説の諸相―七〇年前後の光景
第三章　メディアとしての漫画、甦る被爆都市の記憶―『夕凪の街　桜の国』
補論Ⅱ　福間良明『「反戦」のメディア史―戦後日本における世論と輿論の拮抗』、吉村和真・福間良明編『「はだしのゲン」がいた風景―マンガ・戦争・記憶』
第四章　被害と加害のディスクール―戦後日本と「わたしたち」
第五章　〃「あやまちは繰り返しません」と／誓ったわたしたち〃
あとがき

「原爆文学」の名を冠した研究書として、黒古一夫『原爆文学論―核時代と想像力』（彩流社、一九九三・七）がある。「あとがき」には、目的として「きちんとした形で戦後文学史、現代文学のなかに「原爆文学」を位置付けたい」、「〈近代・戦後〉の意味を「文学」の側から考えようとした」と述べられていた。そのスタンスが以後一貫していることは、『原爆は文学にどう描かれてきたか』（八朔社、二〇〇五・八）が通史的にまとめられ、『林京子論―「ナガサキ」・上海・アメリカ』（日本図書センター、二〇〇七・六）を「「原爆文学論」の集大成」、「おのれの文学観・批評方法の総まとめ」（「あとがき」）としていることからも明らかである。そこでの「原爆文学」は、近代文学（史）および文壇の枠組みにおける「人間」的な価値を体現するものとしてとらえられ、大きな「政治」に対する「文学」側の方途として人々の反核意識を高めることが期待されている。

本書『原爆文学という問題領域（プロブレマティーク）』における「原爆文学」のとらえ方は、黒古のそれとは異なる。第一章の末尾には著者の基本姿勢が示されている。

原爆文学（史）の起源にはナショナルな欲望が充填されている。原爆文学について語ること、原爆文学というジャンルの成立そのものが、戦後日本というナショナルな空間の同一性の構築、脱構築、再構築といった実践と極めて深く結びついている。現在、「夏の花」や「黒い雨」について語る言葉はそこからどれほど自由だろうか。私は原爆文学を、超歴史的ジャンルとしてではなく、戦後日本の言説

空間を構成した問題領域（プロブレマティーク）のひとつとして把握したい。そしてそれは、戦後日本が内包する多様な問題群に常に開かれた領域として、原爆文学を再設定することになるだろう。むろん、こうした試みは原爆文学を容易く手放すこととは別である。いま模索されるべきは、原爆文学が領域化されるプロセスにおいて人々が真摯に語った戦後のヴィジョンを丹念に再構成しながら、なおかつ、出来事としての記憶を掘り起こすことによって、現在の論者自身をも拘束する知と感性を問い返すような実践ではなかろうか。（四七頁）

あるいは、「特定の意味を積極的に作品に読み込むような文脈の形成とその社会的機能を探ること、それはすなわち被爆者／非被爆者、非日常／日常、異常／平常、記録／虚構、政治／文学といった多様な対立軸が折り重なる原爆文学という問題領域（プロブレマティーク）でうごめく、記憶の政治性を検証する試みである」（一六―一七頁）とも述べている。本書が人を刺激し挑発してやまないのは、「原爆文学」をめぐる社会的・歴史的な葛藤や抗争の中へ積極的に分け入り、その多層的なダイナミズムを読み取ろうとしているからだ。本書が再領域化する「原爆文学」の射程は、原民喜「夏の花」、井伏鱒二「黒い雨」、栗原貞子の詩から、中沢啓治『はだしのゲン』、小林よしのり『戦争論』、こうの史代『夕凪の街　桜の国』といった漫画、石牟礼道子、大江健三郎、本島等らの言説まで及ぶ。美術、漫画、社会運動、インターネット記事なども横断して論じていく様は躍動性に富み、注が示すように細かい目配りもきいている。こうした著者の姿勢は、「そうした痕跡（体験者の存在や出来事の、イメージや言葉―引用者注）の一つ一つから過去の出来事を解読する想像力を鍛え、それを語る方法を探りつづけ」、「蓄積されたアーカイブへの向かい方――技術と倫理――を練り上げていくこと」（一四一頁）を実践するものとなっている。

また、長岡弘芳『原爆文学史』や「黒い雨」研究史、近年の「原爆の図」研究、『はだしのゲン』研究など、批評の視座・方法論の検討がなされていることも本書の特徴である。興味深いのは、補論で取り上げられる近年の研究書がいわゆる文学論ではなく、絵画、漫画、メディアを論じるものであり、いずれも領域横断的な批評が行われていることである。著者によれば、「九〇年代以降に限っていえば、先鋭的な〈批評・方法意識〉の多くは、絵画・図像・映像などの視覚表現、博物館や記念碑などの公共展示、被爆者の証言＝物語行為など、狭義の文学研究とは別領域に軸足を置いて開拓されてきた」（六〇頁）という。ここでは「透徹した思考の集成」（四八頁）と評する、米山リサ『広島　記憶のポリティクス』（一九九九／邦訳、岩波書店、二〇〇五・七）などが意識されているのかもしれないが、いずれにせよ、原爆について特権的に語ること、都合よく語ることの危険を己の問題として自覚しながら、近年の研究の成果と問題点を鏡として、自ら立つ研究のありようが探られている。本書を通じて試みられるのは、そうした原爆文学研究の「脱構築、再構築といった実践」であり、「現在の論者自身をも拘束する知と感性を問い返すような実践」である。今後、原爆文学研究につ

いて考えようとするなら、本書を見ずに済ますことはできないし、「原爆」「文学」「研究」のいずれかに関心を持つ者にも、「戦後日本が内包する多様な問題群」への格好の入り口を用意する。

さて、本書は二〇〇一年から二〇〇七年にかけて発表された個別の論文を加筆訂正してまとめられている。著者には、古川ちかし・林珠雪との共編著『台湾・韓国・沖縄で日本語は何をしたのか―言語支配のもたらすもの』（三元社、二〇〇七・三）があるが、単著はこれが最初である。収録された論文の中で、表題論文が一番早く発表されており、そこで言及される朝鮮人被爆者の問題（第一章5節）、被爆都市の記憶とトラウマ（第一章1節）、栗原貞子の詩をめぐる加害と被害の問題（第一章6節）は、第二章以降の展開を予告するものであった。

とりわけ朝鮮人被爆者については、中心に論じた第二章だけではなく、ほとんど全章にわたって話題にのぼる。一九六〇年代半ばから日本人以外の被爆者、特に朝鮮人被爆者の存在がメディアで取り上げられるようになり、長岡弘芳の『原爆文学史』でも頻繁に言及されるが、「戦後の日本／韓国・朝鮮というネーションを所与とすることで、戦前の植民地体制の記憶を忘却するように見えてしま」い、逆に「戦後日本の同一性を維持する良心的アリバイとして機能しかねず、それとともに植民地・戦争の経験を再定義する契機は見失われ」る（第一章、三八―三九頁）。一九五〇年代半ばの「原爆スラム」を再現しようと試みた『夕凪の街　桜の国』では、「在日の痕跡は、きれいさっぱり拭い去られている」（第三章、一二四頁）。ドラマ版『はだしのゲン』（二〇〇七年）における「朴さん」の胸中は、「彼自身の言葉で明かされることはほとんどない」（第五章、二一四頁）等々。

このように繰り返される朝鮮人および朝鮮人被爆者への注視には、小説や漫画やドラマといった「書き直し行為」（原爆について何かを語ることそのものも指す）による、「イメージの変容」すなわち「何が顕在化し、何が忘却されたのか」、「現在どのような社会的機能を備えているのか」（一二七頁）を見極めようとする本書の性格が端的に表れている。「夏の花」「黒い雨」の「正典化」（顕在化）が進むとき「被爆者と非被爆者の国民的和解」が「演出」される一方、大田洋子の忘却化が急速に進んでいった（第一章、三一―三二頁）。詩「ヒロシマというとき」が「アジアへの加害責任を発しようとする〈加害と被害の複合的自覚〉」を「表現化」（顕在化）するのは、「その出発にあったアメリカとの出会い」が忘却化・隠蔽化されることによってもたらされた（第四章、一九七頁）。以上のような重要な指摘も、顕在化／忘却化が鍵となっている。と同時に、本書では「抑圧された他者の存在を歴史の舞台に登録しようとする記述行為が、それを表象したと思われる瞬間に、別の抑圧や忘却を遂行してしまう」（六七頁）という困難さも述べている。とすれば、繰り返し朝鮮人被爆者に言及すること（顕在化）が、一方でどのような忘却化の危険を孕むのか、検討が必要だろう。

著者が挙げた今後の課題は、「被爆者」という主体の虚構性・不完全性を暴きうる大田洋子のエクリチュールの検討（三四頁）、朝鮮人被爆者をテーマとした作品の個々の分析（九八頁）、日本

国憲法と原爆言説との関係（一〇一頁）、「菊とナガサキ」の改稿問題（一〇三頁）、核武装言説の登場と構造（二〇三頁）、序文でも取り上げる石原吉郎の広島と収容所体験をめぐる議論（二三一頁）など枚挙に遑がない。これ以外にも展開される問題は多い。たとえば、文学作品の再検討。近年の原爆小説作品として、三島由紀夫賞受賞作の鹿島田真希『六〇〇〇度の愛』（新潮社、二〇〇五・六）、谷崎潤一郎賞と伊藤整賞を受賞した青来有一『爆心』（文藝春秋、二〇〇六・一一）、表題作「被爆のマリア」を収めた田口ランディ『被爆のマリア』（文藝春秋、二〇〇六・五）がある。いずれも長崎を舞台として選び、被爆六〇年に合わせるように発表され、しかし、『夕凪の街　桜の国』ほどの広範な反響を得たとは言いがたいこれらの作品について、「意味生成の磁場」（第一章、一六頁）、「記憶の政治性」の観点から分析することも可能だ。また、女性被爆者について、本書では『黒い雨』、『父と暮せば』、『夕凪の街　桜の国』などで触れている。「多様な対立軸」の中には、男性／女性、大人／子供の問題も含まれるのだから、「原爆の図」における「母子や少女の形象」という「容易に感情移入を促すジェンダー配置」（六二頁）という視座から、「サダコ」の物語や教科書といった教育と文学が交錯する領域を考察する（四九頁）契機ともなるだろう。対立軸にはヒロシマ／ナガサキという旧くて新しい問題もあるし、本書が焦点化した六〇年代半ばから七〇年代前半という時代設定を、敗戦直後や一九五〇年代に置き換えれば、「原爆文学」という問題領域はまた別の様相を見せるはずである。

せめてできることがあるとすれば、原爆を語る言葉や表現の歴史的堆積におもいきって身を沈み込ませ、そこから生じる苦痛と快楽の狭間から、ほかならぬこの私が執拗に語ってしまうかもしれない〟わたしたち〟とはいかなるものであって、もしくはいかなるものではないのか、粘り強く思考するしかないように思う。それはすなわち、原爆文学の研究――あるいは原爆についての文学的研究――という営みを通して、国家や資本の論理に飼いならされた言葉ではない、別の言葉のありようを模索する歓びであり、願うならば「まやかし」ではない「連帯」を想像＝創造する力を養いたいと夢想するものでもある。（七頁）

「連帯」という語は、「紋切り型に囚われつつも被植民地者同士の連帯を語りだそうとした「南の島」」の持つ「危険な潜勢力」に着目し「五〇年代原水禁運動に対する痛烈な批評」（四一―四三頁）として読み返そうとするなかでも使われているが、本書で明確に語られているわけではない。しかし、先に列挙した著者の今後の課題が、決して一人の研究者で囲い込もうとするものではなく、読者に投げかけられているという点に、本書の「連帯」の可能性が見出される。

（二〇〇八年四月　創言社　二四二頁　二二〇〇円＋税）

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）